

清流 ニュース

発行所
〒192-0904
八王子市安町1-22-25
清流寺
清流ニュース編集室

令和7年度総祈願
本年度教化誓願達成・学徒・教務員増加
日鏡上人五ヶ年報恩御奉公・御七回忌前年の年
寺内・境内整備・有志継続・一口奉納御奉公推進
御利益談を語る信徒の育成・御講願主・御会式参詣者増加
お助行・御法門聴聞励行・御奉公内容充実・教講一同「利益感得

八月の御総講日

一日 十時 御修行日

七日 十時 バースデー総講

十三日 十時 高祖御命日

十七日 十時 開導御命日

廿五日 十時 門祖御命日

於 清流寺

十二日 十時 高祖御逮夜

十六日 十時 開導御逮夜

廿四日 十時 門祖御逮夜

廿四日 十時 飲尊御命日

廿四日 十時 晨尊御逮夜

於 羽村別院

会議

一日 御総講後 役中会議

廿四日 午後一時 参事会



この御教歌上の句には「身代（しんだい）」とあります。

辞書を引きますと「一身に属する財産・資産・身の上」とありますから、つまりは、その人が持ちうる全てのもの、というのが一般的な意味となります。

一人ひとりの顔が違うように、暮らし振りが違うのも人様々に異なります。

良い会社に入り、月何十万という収入がある人もいれば、なかなか就職先が見つからず、家族全員のパートやバイトの収入で、その日その日を一所懸命に生活している方もおられます。

そういう違いがあり、自由に使えるお金もまた変わってまいります。

仮に月に三万円使える人もいれば、いや私は一万円・五千円……といった具合で、ご奉公等で御有志をさせていただく、という場合においても、人によって様々変わってくる事でしょう。

ご信心の世界においては、この身代は「財」に限った事ではありません。

「身」・「命」・「財」の御奉公ということ、つまり、身体・時間・財産、こういった面から、お寺を、宗門を護持していく、という事を教えて頂きます。

この身・命も、人によって

御教歌

身代の有無はしれたり 信者たち

御法のために出すと出さぬと

住職 長谷川 清泊

(御牧家蔵)

様々です。

たとえば、どこにも身体に病なく、健康に毎日を送る方もいますし、薬が手放せず、通院の日々を送る人もいます。（身）小さい頃から両親祖父母に連れられてご信心されてきた方もいれば、齢七〇・八〇となつてご信心にお出会いされた方もいます。（命）

たとい、本日の御教歌でお諭し下さるのです。収入はあっても、いざ御有志となると、欲の心が先に出て、なかなかその気持ちになれない、という方がいる一方で、切り詰めた家計の中でも、まずお初をとつて御有志にあてるといふ方もいらつしやいます。

喜んで捨てる、では何を捨てるのか。ここでは「我執を超え」とあります。

数少ない私のお金、ご奉公の為に使うなんて、勿体なく一銭たりとも出来ませんといった心。年だから、身体が弱いか、もう私はお参詣できない、家でお参詣してるからいいでしょう？と決めつけて、自分考えに固執する態度。「これは自分のものだ。誰にもあげるつもりはない」という欲の心、執着する心を、人の為、御法の為に喜んで捨てる、これが喜捨という意味になります。

自分を変えた、自分自身に徳を積むことがまず大事な事です。たとえ行い一つが小さいものであつたとしても、それを続けていけば、一粒万倍の功德、その果報が必ず返ってくる。

欲に勝ち、「させていたただけて良かった」と思う喜捨の精神が、我が身を養うものになります。

喜捨にまつわる有名なお話に「貧女の一灯」があります。とある街に仏さまが説法に來られるというので、人々はこぞつて、灯をとすため油をかうのですが、とある女性は、貧しくてほんの少しの油をかう事も出来ませんでした。

そこで、女性は、自分の一番の自慢であった美しい髪を、「仏さまの説法を聞かせていただく為ならば」と、惜しげもなく切り落とし、そして、ほんの僅かのお金に替えて、油をかうのです。

やがて仏様がお出ましになつて説法が始まると、その途中で突如大風が吹き始め、人びとが灯した灯が次々と消えていつてしまひます。

そんな中、この女性の灯りだけは、風に負けることなく、最後まで燃え続けた。

「この灯りを用意したのは誰か？」と問うた仏さまが、女性から事の次第を聞くと、この女性の志を大変お褒めになつた、というお話になります。

ご奉公の場、御有志の場、信心の中では、様々な功德の積みどころが存在します。「私にはできない」と決めつけて、頑なに自分考えを貫き通すか、「させていたただこう」という気持ちを持つて積功累徳の志を立てるか。信心に向き合う心一つで、私達の果報は大きく変わってくるのです。

開導聖人御指南

「御法の為には身分相応に金銭を惜しむ事なかれ。（乃至）御法の為には身を勞し、心を尽くすべし。煩惱の為に身をつからし、心をつかふことなかれ」

(御弟子旦那抄 下 扇全十四 巻八七頁)

「余裕があればする」「ないから出来ない・お参詣しない」という心では、この喜捨の心が養えてない証拠となつてしまひます。

「志が有る」と書いて有志。惜しむ心に打ち勝ち、身・命・財の面でたとえ少しでもさせていたただこうと決定する。この心がやがて功德に変わると心得、日々励ましていたただくことが大事大切です。